

餓鬼草紙攷

——曹源寺本第三、四段について——

黒田 彰

一

古代末期、仏教における末法の到来と浄土教の興隆を背景に、或いは、我々が死後、赴かねばならない六道の一、餓鬼道の世界を絵画として視覚化し、簡単な説明（詞書）を添えたものに、餓鬼草紙とよばれる一群の作品がある。餓鬼草紙は、六道絵と総称される、一連の絵巻の一部と考えられ、現在、

(一)河本家本（東京国立博物館蔵）

(二)曹源寺本（京都国立博物館蔵）

の二つが伝わり、いずれも古代末期、十二世紀後半、その半ば頃の制作とされる、絵巻の優品である。小稿で取り上げてみた^①のは、その内の、七段から成るとされる(二)曹源寺本で、特に目連説話を扱う、曹源寺本餓鬼草紙第三、四段における絵と詞

書の問題、取り分けその第四段の出自について、考えてみたいと思うのである。^②

始めに、図一として、曹源寺本餓鬼草紙第三段を掲げよう。^③第三段は、詞書と絵から成っているが、まず図一左の絵の内容は、例えば小松茂美氏が、次の如く解説されたものである。^④

まず、第三段は、目連が、はじめて六神通（六種の神通。神境・天眼・天耳・他心・宿命・漏尽の六つ）を得て、亡母の所在を知った。が、亡母はどうしたことか、餓鬼道に落ちて飢えやせ、骨と皮ばかりとなっていた。目連は悲しみ泣いて、鉢に食物を盛って、母に与えた。母がそれを食べようとすると、それはばつと炎を生じて炭となった。目連は深く悲しみ、仏の許に詣でて、母を救う手立てを問う。画面は、大河を隔てて、手前に目連と餓鬼となった母が対



図一 曹源寺本餓鬼草紙第三段

図一、曹源寺本餓鬼草紙第三段には絵の右に、それを説明する詞書が付いている。今その全文を翻字して示せば、次の通りである（句読点を施す）。

第三段詞書

目連はしめて六通をえて、亡母の恩をむくひ□とおもひて、その生処をみるに、餓鬼の中にむ□れたり。目連かなしひなきて、鉢に食物をいれて、母のところゆいて、これをあたふ。母えて食せむとするに、いまたくちにいらざるに、ほのほとなりぬ。目連かなしむて、ほとけのみもとにまうて、母をすくふへきはかりことをとひたてまつる

目連はしめて六通をえて亡母の恩をむくひとおもひて、その生處をみるに、餓鬼の中にむ□れたり。目連かなしひなきて、鉢に食物をいれて、母のところゆいて、母えて食せむとするに、いまたくちにいらざるに、ほのほとなりぬ。目連かなしむて、ほとけのみもとにまうて、母をすくふへきはかりことをとひたてまつる

まず、右の、絵と詞書との関係を少し検討してみよう。

第三段の詞書、絵の源泉に、孟蘭盆経があることは、早くから指摘されている。孟蘭盆経は、疑経の疑いの濃い經典だが、その詞書との対応部分を示せば、次の通りである（大正藏経に拠る。〔 〕にその校異を掲げる）。

大目乾連始得六通、欲度父母報乳哺之恩。即以道眼觀視世間、見其亡母生餓鬼中、不見飲食皮骨連立。目連非哀、即鉢盛飯往餉其母。母得鉢飯、便以左手障飯右手搏飯。食未入口化成火炭、遂不得食。目連大叫悲号啼泣、馳還白仏、具陳如此。

詞書と孟蘭盆経とは確かによく対応し、詞書の源泉に孟蘭盆経があることは間違いないであろう。しかし、第三段詞書には、なおさらに細部までよく一致する、もう一つの文献のあることに注目すべきである。即ち、それは、小松茂美氏が、「この詞書は、『三宝絵詞』を地に踏まえているように思われる」と指摘された、源為憲の三宝絵である。現存する三宝絵諸本の三本（旧関戸本〔平仮名交じり〕、東大寺切とも。名古屋市博物館蔵）、東寺観智院本〔片仮名交じり〕、前田本〔真名体〕の内、旧関戸本に目下、該当部の欠けることが惜しまれるが、今東寺観智院本に拠り、その巻下24「孟蘭盆加自恣」詞書との対応部分を示せば、

次の通りである。

孟蘭盆経云、目連ハシメテ六通ヲエテ、父母ヲワタシテ、ヤシナヒ立タル恩ヲムクヒント思テ、其生タラム所ヲミルニ、ソノ母餓鬼ノ中ニ生テ、飢ヤセタルコトカキリナシ。皮ト骨トツラナリタテリ。目連カナシミナキテ、鉢ニ飯ヲモリテ、ユキテ母ニアタフ。左ノ手シテハ飯ヲサツク。右ノ手シテハイサ、カトリテクハムトスルニ、イマタ口ニイラヌニ、飯スナハチ火トナリ、スミトナリヌレハ、クフ事アタハス。目連クヒカナシヒテ、仏ニ申

例えば傍線部に見るような、細部に互る詞書との一致から考えて、第三段詞書の出典に三宝絵のあることは、ほぼ動かぬように思われる。さて、曹源寺本餓鬼草紙が実際、どのような三宝絵のテキストを用いたのかということは、旧関戸本の本文も伝わらず、不明とせざるを得ないが、後世のものながら、三宝絵の当条のみを抜書した説草、高山寺本『孟蘭盆供加自恣』一帖の如き資料の伝存も確認されており、或いは、そのような抜書形態の三宝絵が用いられた可能性も、是非視野に入れておく必要があるだろう。

そして、目を絵（図一左）に転じると、聊か奇妙なことに気付く。例えば、目連と対座する母の動きである。図二に、第三

段の母の部分図を掲げよう。図二における母の動作は、例えば小松茂美氏が、

右手に鉢を持ち、左手で食物をつかむ

と説明された動きを示している(上記解説)。ならば、このような母の動作は、一体何処から出てきたのだろうか。それは、詞書においては省略されてしまっているが、明らかに例えば三宝絵の、

左ノ手シテハ飯ヲサツク。右ノ手シテハイサ、カトリテク
ハムトスル(東寺観智院本)

に基づくものである。但し、右の東寺観智院本三宝絵の本文には一部疑念が存するので、以下に三宝絵諸本及び、孟蘭盆経(異訳とされる報恩奉盆経を添える)の該当部分を一覧として掲げよう。

・左手抑飯、右手少取、欲食(前田本)

・左ノ手ヲシテ鉢ヲ抱テ飯ヲ取テ、右手ヲシテ聊ニ取テ欲食ニル(高山寺本)
 ・便以左手障飯、右手搏飯(孟蘭盆経)
 ・便以左手障飯、右手搏食(報恩奉盆経)

東寺観智院本「左ノ手シテハ飯ヲサツク」の「サツク」は疑問で、孟蘭盆経の「障」からすると、或いは、「サ、フ(ハ)」の誤写かと考えられ、左手で飯を他から遮るようにしての意味であろう。高山寺本「鉢ヲ抱テ」は、大正藏経における宋、元、明本の異文「障」鉢に近い(搏飯(孟蘭盆経)は、飯を手で丸めること、「搏」(報恩奉盆経)なら、取る、掴む意。因みに、後述唐宗密の孟蘭盆経疏に引く本文は、「便以左手障鉢、右手揣食」で、揣も、丸めること)。右の一覧から考えると、ここは元来、母は左手で飯または、鉢を他から遮り守り、右手で飯を丸め、または、取って食べたということらしい。すると、図二の母の動きも自ずと明らかで、片手で鉢または、飯を他から遮り、もう一方の手で飯を掴んで食べようとしているのである。そして、その鉢を掴む動作は、高山寺本「鉢ヲ抱テ」に極めて近いことが分かる。さて、図二にあつて奇妙なのは、母の両手の動きである。即ち、三宝絵(孟蘭盆経)の、左手で鉢(飯)を抱え、右手で飯を掴むとされる動作が、図二にあつては、どう見ても逆になっている。つまり、右手で鉢を抱え、左手で飯を掴んで



図二 第三段部分(母)

いるのである。¹⁰ 絵師の思い違いか、または、そのような文献があったのか、目下、判然としないが、ともあれ、図二の母の両手の動きは、詞書の踏まえた本文とその図像との間に、一定の隙間、ないし、ずれがあったことを物語っている。

図像と本文とのずれ、不一致という現象は、私の近時扱っている孝子伝図と孝子伝との間においても屢々見掛ける課題であって、時としてその現象は、大きな問題を孕んでいる場合が多い。一例を上げれば、御伽草子『二十四考』12董永の挿絵には、雲に乗る天女、それを見送る董永、そして、その董永の傍らに子供が一人描かれている（嵯峨本にも）。この子供こそは、敦煌本董永変文や董永遇仙伝（清平山堂話本雨窓集上所収）に喧伝する、董永の子の董仲（舒）なのだが、この子供のことは御伽草子本文には一切出てこないのである。¹¹

ところで、曹源寺本餓鬼草紙第三段の絵（図二）と詞書との隙間に関して注意すべきは、その図像と本文とのずれが、詞書に出て来ない部分、即ち、詞書が省略した、上掲一覽の三宝絵の箇所において生じていることであろう。¹² 換言すれば、そのずれは、詞書として全く姿を現わさない地平で生起しているのである。このことは、件の詞書を幾ら眺めていても、その絵の正体は見えて来ないことを示している。

二

続く第四段の絵、また、詞書は、さらに奇妙である。図三は、第四段の詞書と絵を示したものである。¹³ この図三左の絵柄について、小松茂美氏は、次のように解説されている。¹⁴

図は、第三段と同じ、もとの河畔。五条袈裟を着けた目連は、敷物の上に座っている。餓鬼にはやらじと、鉢を尻に敷く母は、食物をせつせと口に運んでいる。集まった三人の餓鬼が、やせ細った手を差し伸べて、彼女に食を求めている。背景となる渺々たる大河の波の表現が、見事な筆致を示しているのが印象的（日本の絵巻7）

本図にも、それに先立つ詞書がある。その詞書全文を翻字して示せば、次の通りである。

第四段詞書

ほとけこたへてのたまはく、なむち飲食をまうけて、自恣の僧を供養して、その、こりをもて、は、□あたへは、おのつからうることもありなむ。目連、仏の御おしへのま、にして、食物をもてゆきて、母にす、むるに、ほむらになることなくして、こ、ろのま、に食することをえたり

第三段と違って、第四段詞書に関しては、三宝絵、盂蘭盆経と



図三 曹源寺本餓鬼草紙第四段

の関わりが殆ど見出だせない。強いて言えば、「仏ノタマハク……自恣ノ僧ヲ供養スレハ」(東寺観智院本三宝絵)、「仏言……其有^三供養此等自恣僧者」(孟蘭盆経) 辺りが一致するとも言えるが、例えば詞書の、

その、こりをもて、は、□^Eあたへは、おのつからうること
もありなむ

は、孟蘭盆経や三宝絵には見えず、且つ、その救済法も孟蘭盆経とは異なっている点に、注意すべきである。即ち、孟蘭盆経は、七月十五日に自恣僧に飯食(自恣食、鉢和羅飯)を供養せよと説くまでで、それを衆僧が食することによって、目連の母また、供養者の父母以下が救済されるとするのであって、現に目連の母もそのようにして餓鬼道から救われた(是時目連其母即於^二是日^一得^レ脱^二一劫餓鬼之苦^一)と説いているに過ぎない(三宝絵も同じ)。だから、孟蘭盆経(三宝絵)は、詞書の「その、こりをもて、は、□^Eあたへば」つまり、自恣食の残りを母に与えるという救済法まで踏み込むことはないし、当然のことながら、詞書の、続く、

目連、仏の御おしへのま、にして、食物をもてゆきて、母
にす、むるに

以下の、母の得脱を記すこともない。¹⁵⁾このことから、曹源寺本

餓鬼草紙第四段の詞書は、第三段の場合とは異なり、三宝絵、孟蘭盆経を出典とするとは考え難い。何か別のものを典拠とすべきである。その典拠は、目下、不明とせざるを得ないが、第四段詞書の内容に、極めて近い文献を一つ、上げておく。それは、日蓮の御書、刑部左衛門尉女房御返事である。そこに含まれる目連説話の本文を示せば、次の通りである。¹⁶⁾

夫、目連尊者の父をば吉占師子、母をば青提女と申せしなり。母死して後餓鬼道に墮たり。しかれども、凡夫の間は知るることなし。証果の二乗となりて天眼を開て見しかば、

母餓鬼道に墮たりき。あらあさましやといふ計もなし。餓鬼道に墮てて飯をまいらせしかば、纔に口に入かと思えしが飯変じて炎となり、口はかなへの如く、飯は炭をおこせるが如し。身は灯炬の如くもえあがりしかば、神通を現じて水を出して消す処に、水変じて炎となり、弥火炎のごとも多あがる。目連自力には協はざる間、仏の御前に走り参り申してありしかば、十方の聖僧を供養し、其生飯を取て纔に母の餓鬼道の苦をば救給へる計也¹⁷⁾

右は、前半の第三段詞書に似ることも興味深いが、特にその末尾の傍線部が、第四段と同一内容のことを述べている点に注目したい。文中の生飯は、散飯なども書く仏教語で、一般に日常

の食膳の飯の上部を、食前に少し取り分け、餓鬼等に施すものを指すが、第四段の、「自恣の僧を供養して、その、こりをもて、は、□あたへは」と言うのは、日蓮の言う、自恣食の「生飯」のことであったことがわかる。すると、日蓮にせよ、第四段の詞書にせよ、孟蘭盆経（三宝絵）が単に孟蘭盆会（盆供）の起源を説こうとする立場に留まるのとは異なり、実際の施餓鬼の方向へ一歩、踏み出していることになるだろう。この問題はまた、後程触れることとして、ここで、上引詞書に続く、第四段の絵（図三）の方に目を転じてみよう。

図三左の絵の内容は、小松茂美氏の説明された如くである。そして、その説明を見ても明瞭なように、第四段においては、第三段の場合と較べ、詞書と絵との乖離が、一層甚だしいものとなっていることに気付く。取り分け、例によって、目連の母の動きが独特である。図四は、その母の部分図を掲げたものである。¹⁸⁾ 図四の母の動作は、丸めた飯（後述）を口へ運んでいること以外、どのように考えても、第四段の詞書とは関わりがない。言わば、絵師の筆は詞書とは全く別次元の情景を描き出している。では、図四の情景は、一体何を描いたものなのであるうか。結論から先に述べれば、それは、浄土孟蘭盆経に記す、以下の一節を絵画化したものと断じて良い。その本文を記せ



図四 第四段部分 (母)

ば、次の通りである。
(P二二八五に拠る。
図五参照)。

図五参照)。

今母死入餓鬼

中。目連於初

七日、送一鉢

飯、上靈牀上。

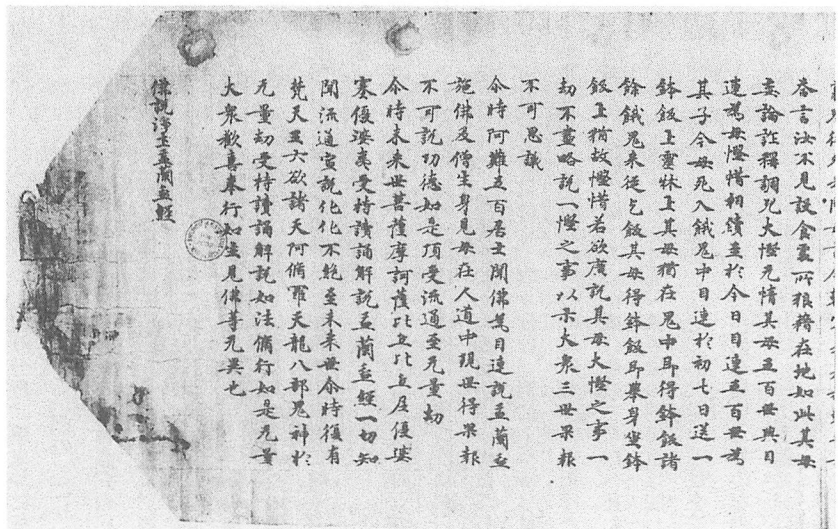
其母猶在鬼中。

即得一鉢飯、諸

余餓鬼、來從

乞飯。其母得鉢飯、即拳身坐鉢飯上。猶故慳惜

淨土孟蘭盆經は、次のように記している。目連は、母の死後初七日に当たり、遺骸を載せた牀に一鉢飯を捧げた所、母は餓鬼道に留まったままだった。母が鉢飯を得たことを知った他の餓鬼達は、自分も分け前に与ろうと母の許に集まって来て、飯を要求した。目連の母はそのことを察するや否や、直ちに鉢飯自体を他の餓鬼達から守ろうと、一身を挙げてその上に坐り込んだ。死後もなお母は、生来の慳貪が治まらなかつたためである。と。淨土孟蘭盆經に言う所は、前掲小松茂美氏による、絵の解説とよく合っていることが分かる。そして、第四段の絵



図五 淨土孟蘭盆經 (P2185)

は、右の浄土孟蘭盆経に、基づいて描かれたものと考えて、まず間違いない。さらに、第四段の絵が、第三段の絵における、母の両手の奇妙な動きを受け、引き続き、詞書には全然現れない地平で、目連の母の慳貪さをモチーフとして、描出されていることも了解出来るだろう。但し、浄土孟蘭盆経には表われない、鉢中及び、母の左手の飯が団子様に描かれている点は、例えば前述、孟蘭盆経の「搏飯」(孟蘭盆経疏「搗食」と関わることに、注意すべきである。また、第四段の絵の母の姿形が第三段のそれと異なり、次の第五段の絵における、餓鬼の三つの救済過程、即ち、餓鬼身、人間、天人への転生過程を描く内の、中央の人身に酷似していることは、さらに一考を要する。因みに、第五段の舞台が恒河であって(詞書に、「恒河のほとりに五百の餓鬼あり」と言う)、第五段の絵の右半から、恒河が始まっていることも、或いは、第四段及び、第三段の絵の背景を流れる川と、関連するかもしれない(第五段詞書の出典については、後掲渡辺里志氏の論文に詳しい)。

ところで、上引、浄土孟蘭盆経というのは、これまで屢々言及してきた孟蘭盆経とは、全く別の経典である。では、それは一体どのような経典なのであろうか。次に、曹源寺本餓鬼草紙第四段の絵の研究史と問題点を振り返りつつ、そのことを検討

してみたい。

三

第四段の絵が浄土孟蘭盆経に拠るものであることを、始めて指摘されたのは、宮次男氏であろうと思われる。宮氏は、昭和五十五年に著された「絵巻物に見る日本仏教―餓鬼草紙を中心にして―」と題する論攷において、

この『浄土孟蘭盆経』は……偽経と見做されているが、この経が、わが国に伝来していたかどうかは明らかにしえない。しかし、この図様に関するかぎり、『浄土孟蘭盆経』によるとみるのが一番穩当ではなからうか……以上、曹源寺本「餓鬼草紙」第三、四段の絵をみると……第四段は『浄土孟蘭盆経』所依といえることができる

と言われている。次いで、鷹巢純氏も、

第四段の図様の典拠は、『仏説浄土孟蘭盆経』の系列であると考えて間違いない²⁰⁾

と同様の指摘をされているが、さらに鷹巢氏は、

『仏説浄土孟蘭盆経』は敦煌本として一巻現存するきりの経典で、これが曹源寺本成立当時に日本に伝播していたと

いう確証はどこにもない。さらに、筆者の知る限り、羅卜譚を含む短目連説話系列に属するものは、この他に確認されてはいない。しかし、七世紀前半に成立したと推定されるこの経典が、目連救母説話という人気の高い題材を扱っていないながら、その後五世紀の間に何ら影響を及ぼさなかったとは考え難い。今は失われた『仏説浄土孟蘭盆経』に因む何らかのテキスト、または図像そのものが中国から伝播し、曹源寺本第四段の図様を決定したと考えたい。

と述べて、浄土孟蘭盆経が敦煌文書の孤本であることや、その日本伝来が確認し難いことなどを問題とし、第四段の絵と浄土孟蘭盆経との直接的な関係を留保ないし、否定された如くである。さらに渡辺里志氏も、

母の餓鬼が鉢の上に腰を下ろしているところへ三匹の餓鬼がすり寄っている表現は、この詞書だけでは説明できないが、目連説話を説く文献の一つである『浄土孟蘭盆経』のなかのある記述と関連づける興味深い指摘がある^{②③}と鷹巣説を確認し、

第四段の絵画については、部分的に『浄土孟蘭盆経』の影響を受けていることは否定できない（注（27））^④と言われている。さて、浄土孟蘭盆経というのとは一体、如何な

る経典なのであるうか。そしてまた、それは果して、日本へは将来されていなかったのであろうか。

浄土孟蘭盆経の名が、経録に始めて見えるのは、大唐内典録（唐、麟徳元（六六四）年、道宣撰）においてであるとされ、その巻七、歴代小乘蔵経翻本单重伝訳有無録第三に、

孟蘭盆経（一紙。又別本五紙、云「浄土孟蘭盆経」。未知所出）

と見える。次いで、大周刊定衆経目錄卷十四にも、

孟蘭盆経（右別本五紙、云「浄土孟蘭盆経」。未知所出）

との、ほぼ同文がある。浄土孟蘭盆経が、経録においてその名前前で録されるのは、開元釈教録（唐、開元十八（七三〇）年、智昇撰）が初見であるとされ、その巻十八、別録之八、別録中疑惑再詳録第六に、

浄土孟蘭盆経一卷五紙

右一経。新旧之録皆未曾載。時俗伝行將為正典。細尋文句亦涉人情。事須審詳且附疑録

などに見える。当経は、名前こそ孟蘭盆経に似るが、孟蘭盆経とはまた、別の経典であって、一名を大盆浄土経（大盆経とも。法苑珠林六十二祭祠篇六十九猷仏部二所引）とも呼ばれる、七世紀前半の成立と見られる疑経である（対する孟蘭盆経の方

は、小盆報恩經、小盆經等と呼ばれたらしい。当經は、開元釈教録の疑惑再詳録への編入に示される如く、疑經と見做されて各種大藏經にも採られなかったため、長らくその具体的内容が知られることのないまま、近代に至った經典に外ならない。その浄土孟蘭盆經がP二一八五として敦煌文書中に唯一本のみ現存していることが、本田義英、岩本裕らの諸氏によつて確認、報告されたのは、比較的近時のことに属する。²⁵⁾

源を孟蘭盆經に発し、中国における目連經や目連變、我が国における前述、三宝繪下24、三国伝記九・一「目連尊者救母事」等を形成するに至る、目連救母譚の一流は、日中文学史における、大きな学際的テーマとなつているが、例えば唐、宗密の孟蘭盆經疏下の、

仏言、汝母罪根深結（孟蘭盆經）

の注釈の中に、

有經中說、定光仏時、目連名羅卜、母字青提。羅卜欲行、囑其母曰、若有客來、娘當具膳。去後客至。母乃不供。仍更詐為設食之筵。兒婦問曰、昨日客來、若為備擬。母曰、汝豈不見設食處耶。從爾已來五百生中、慳慳相

と見える「有經」が、件の浄土孟蘭盆經であろうと考えられ、

加えて、そこに、本生譚の形式を借りつつ、前世において目連の名を羅卜、母の字を青提と言つたことか、客への設食を惜しんでそれを許つたこと等が、目連變においてそのまま、目連在俗中の出来事として見えることから、浄土孟蘭盆經が、孟蘭盆經から目連變への展開を示す、重要な資料となつてゐることは、周知の如くである。そして、曹源寺本餓鬼草紙第三、四段も無論、そのような流れの中に、位置付けてゆくべき作品であることは、改めて言うまでもないことであろう。

ところで、浄土孟蘭盆經が早くから我が国へ將來されてゐたことについては、一、二の徴証がある。その一つは、正倉院文書であつて、その統々修第十二帖第三卷、天平五（七三三）年の「小乘經雜帙」第二帙の中に、

浄土孟蘭盆經 用五

と見えるものである。²⁶⁾このことは、夙に石田茂作氏の『奈良朝現在一切經疏目錄』支那撰述疑偽經一八一に指摘されてゐるが、浄土孟蘭盆經は、我が国上代天平年間以前、既に傳來していたことが確認出来るのである。もう一つは、大谷大学藏、寛治二（一〇八八）年序、長承二、三（一一三三、四）年写、積成安の手に成る三教指帰注集である（以下、成安注と呼ぶ）。その巻下に、三教指帰下の「羅卜之拔母之苦」を注して（さ

続

て、空海が「羅卜」の名を知り得たことは、一考を要する)、浄土孟蘭盆の一部を引いている。今大谷本に抛り、成安注のその抄出部分を示せば、次の通りである(天理本、前田尊経閣本を参照した。句読点、返り点を施す)。

注云、浄土孟蘭盆経云、爾時阿難白_レ仏言、世尊、目連比丘母、行_テ何業_ヲ為人_{ナリ}、作_テ何罪過_ヲ、受_テ生餓鬼_ニ、三劫受_ル罪_ヲ。目連何因縁、故託_ニ其家_ニ。仏告_ニ阿難_ニ、過去有_レ仏、名_ニ定光_ト。出_ニ現於世_ニ、住_ニ羅陀國中_ニ。爾時目連、生_ニ一婆羅門家_ニ、字_ニ羅卜_ト。其兒羅卜、少_ク好_シ布施_ヲ。母大慳、不_レ樂_シ布施_ヲ。兒出_テ遠行_シ。属_レ母言_ニ、朝_ニ有_ニ多客_ヲ来_テ覓_ニ當_ニ為_レ客_ノ設_レ食_ヲ。是其兒行後、多客来_ル。母都無_レ設_レ食_ヲ。兒来_テ問_ニ母言_ニ、今朝客来乎_{。母}荅_ニ曰_ニ、汝不見_レ設_レ食_ヲ。所_ニ狼藉_ニ在_ニ地_ニ。如是其母安語_ス。五百世人_ニ餓鬼_ニ中_ニ。目連怜_ヒ母_ノ死_ニ入_ニ餓鬼_ノ中_ニ、助_レ之_ヲ、令_ニ生_ニ天得_ニ樂_ヲ。委_ニ見_ニ本_ニ經_ニ。

右の成安注は、引用書名が冒頭に「浄土孟蘭盆経云」と明記される如く、浄土孟蘭盆経を引いたものと考えられる。参考までに、P二二八五、浄土孟蘭盆経の該当部分を示せば、次の通りである。

爾時阿難……白_レ仏言、世尊、目連比丘母、行_テ何業行_シ、生_レ世之時、作_テ何罪過_ヲ、受_テ生餓鬼_ニ、三劫受_ル罪_ヲ。目連何因縁、

故託_ニ其家_ニ……世尊告_ニ阿難_ニ……過去……有_レ仏、名_ニ曰_ニ定光_ト。出_ニ現於世_ニ、住_ニ羅陀國中_ニ。爾時目連、生_ニ一婆羅門家_ニ、字_ニ羅卜_ト。母字清提。其兒羅卜、少_ク好_シ布施_ヲ。其母大慳、不_レ樂_シ布施_ヲ。其子羅卜、出_テ外遠行_シ。嘱_レ母言_ニ、朝_ニ有_ニ多客来_テ覓_ニ兒_ノ。阿婆当_ニ為_レ客_ノ設_レ食_ヲ。恭_ニ須_ニ一_ニ使_ニ飲_ニ喜_ニ是_ト。其母行後、多客来_ル。其母都無_レ設_レ食_ヲ……兒從_テ外来_テ問_ニ母言_ニ、今朝客来……母荅言、汝不見_レ設_レ食_ヲ。所_ニ狼藉_ニ在_ニ地_ニ。如此其母妄論詐称……其母五百世、与目連為_レ母。慳惜相_ニ統_ニ、至_ニ於今日_ニ。目連五百世為_ニ其子_ト。今母死_ニ入_ニ餓鬼_ノ中_ニ。目連於_ニ初七日_ニ……

末尾その他に、言い換えや省略等が認められるものの、成安注は、ほぼ忠実に浄土孟蘭盆経を引用していることが知られる。因みに、成安注のその引用部分は、例えば前述、宗密の孟蘭盆疏の浄土孟蘭盆経の引用部分と重複するが、成安注がその孫引きなどでないことは、両者を比較してみれば、自ずと明らかである。加うるに、餓鬼草紙第四段の絵の基づいたと思しい、当経の問題の箇所が、成安注の上記引用部の直後に当たること、頗る興味深い事実とすべきである。このように、成安注が浄土孟蘭盆経を引用、抄出していることから推して、当経が十一世紀後半、或る程度の流布をみていたことは、ほぼ間違いない

い。

以上、一、二の徴証を上げたに過ぎないが、それらを通じ、浄土孟蘭盆経は、早く上代、天平年間以前に日本へ齎され、なお古代全般に亘って行われたものと考えられる。すると、曹源寺本餓鬼草紙の成立時、十二世紀後半に当経が伝存、絵師その他により参看されることも、十分あり得たことと思われる。

さて、前述の如く、曹源寺本餓鬼草紙第三段の絵は、孟蘭盆経（三宝絵）によるものである（詞書も同様）。そして、第四段の絵が浄土孟蘭盆経に基づくものであるとすると、それに対する、施餓鬼の色合いを強く打ち出した、第四段の詞書（典拠未詳）との関係は、果たしてどのように捉えれば良いのか。所謂孟蘭盆会と施餓鬼との関連について、例えば吉岡義豊氏の、

中国の施餓鬼には少なくとも三大系統がある。一は孟蘭盆経系、二は水陸儀文系、三は瑜伽焰口経系である。その出現もおおむねこの順序によつてゐる。孟蘭盆経系のもものは目連孝母の俚説を以て、深く民衆の宗教心をゆり動かし、水陸儀文系のもものは、無主孤魂の普度供養を打ち出すことによつて、惨めな立場の民衆に來世の安心を与え、更に瑜伽焰口経系の説相は、その法事儀礼に組織的呪術的威力をあたえたということが出来よう。実際には中国の施餓鬼法

は、この三系統が混淆して行なわれている。但、これが出家僧侶の儀軌法式の面から見ると、瑜伽焰口の密教的色彩が表にあらわれるし、反対に民衆の受持している宗教的感情の面から考察すると、目連報母の素朴な説話唱導の人情譚につきあたる。この兩者の間に介在して、より中国人的な思想感情を摂取し、もう一步前進すれば、そのまま道教の施餓鬼儀式に転回する立場にあるのが、水陸儀文一類のものである。

と指摘されているのが、中国の場合ながら、非常に参考となる。⁴¹ また、吉岡氏は、その混淆、習合の故、私達にとつて極めて理解しにくい、孟蘭盆と施餓鬼との區別に關し、

孟蘭盆の行事は年一回であるが、施餓鬼普度は元來時を定めず隨時に修すべきものである。殊に密教の施餓鬼法は常時これを修するのが立て前である

と明快に喝破されてもいる。現存餓鬼草紙中において、河本家本などに対する、曹源寺本の特徴について、例えば宮次男氏は、さて、この絵巻を通観すると、その内容はいずれも餓鬼救済に終始することは明らかである……曹源寺本「餓鬼草紙」には救いが示されている

と指摘し、さらに、

いわば施餓鬼絵ともいえる内容である

と言いつちられた。^③現に、曹源寺本餓鬼草紙の第六、七段などが、餓鬼救済の実践法たる施餓鬼を代表する經典の一、不空訳の救拔焰口餓鬼陀羅尼經に基づくことは、周知の通りである。すると、その第四段詞書は、孟蘭盆經（三宝絵）による第三段との関係においてのみ、見るのではなく、全体との関連において、仮に上記吉岡氏の分類に従うなら、孟蘭盆經系と瑜伽焰口經系との関連において、或いは、両者の接点として、一考する必要があるように思われる。

それにしても、曹源寺本餓鬼草紙第三段の詞書と絵に認められる隙間、第四段の詞書と絵との顕著なずれは、絵と詞書、即ち、画像と本文との関係が、決して直線的なものでないことを物語っている。言わばそれらは、ポリフォニーを奏でているのである。そして、もしそれらを解釈しようとするなら、暫く画像とテキストを離れ、二つを文学史のコンテキストに置くことが求められる。さて、曹源寺本餓鬼草紙第三、四段の場合、その文学史の空間は、例えば正倉院から敦煌までの幅をもっている。

注

① 小松茂美氏編『餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』（日本絵巻大成7、中央公論社、昭和52年。日本の絵巻7、中央公論社、昭和62年）参照。

② 図一は、便利堂の複製に拠る。

③ 注①前掲日本の絵巻版図版解説

④ 日本絵巻物集成9（雄山閣、昭和5年）所収、田中一松氏による「餓鬼草紙」解説（後、『田中一松絵画史論集』（中央公論美術出版、昭和60年）上に再録）に、「而して第三第四の両段にある目連尊者とその母の話は孟蘭盆經の所説を採つたものである」とされる。

⑤ 牧田諦亮氏『疑經研究』（京都大学人文科学研究所、昭和51年）一章五（三）に、「孟蘭盆經（法華法護訳、大正一六、七七九）のごときも、目連尊者のために仏が亡母救済のために七月十五日自恣日に衆僧に供養すれば、七世の父母は餓鬼倒懸の苦から超脱することができる」と説き、仏者にも孝養を尽す方途のあることをあかしている。この孟蘭盆經は異訳として伝わるものをふくめて、いずれも真經として藏経に編入されているが、仏説孝子經などとともに文面から判断しても、おそらく中国撰述の疑經であろう」（49、50頁）と言われる。

⑥注①前掲日本絵巻大成版解説、小松茂美氏「餓鬼・地獄・病草紙と六道絵」

⑦小林芳規氏「高山寺蔵『三宝絵』詞章遺文」(『鎌倉時代語研究』1、昭和53年3月)に翻刻が(『諸本対照三宝絵集成』(笠間書院、昭和55年)下24にも転載される)、また、安田尚道氏「高山寺蔵本『孟蘭盆供加自恣』(三宝絵抜書)の研究」(高山寺資料叢書別巻『高山寺典籍文書の研究』(東京大学出版会、昭和55年)所収)に影印と翻刻が収められる。

⑧図二は、注②前掲の複製に拠る。

⑨このことは、新日本古典文学大系31所収の三宝絵下二十四、脚注九(二〇二頁)に指摘がある。

⑩例えば宮次男氏も、「この母の姿(図二のこと)は経に云う」(以左手障飯右手搏飯)と一致しないなどと指摘されている(注②後掲論文)。

⑪拙著『孝子伝の研究』(佛教学大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年)Ⅱ二、注②参照。

⑫さらに図一の絵の左上に描かれた、目連が靈鷲山の釈迦の許へ参じている場面なども、孟蘭盆経説話の本話としてはおかしい。目連は、祇園精舎の釈迦の許へ詣つたのである(孟蘭盆経)。靈鷲山は、摩竭陀国王舎城の東北にあり、祇園精舎

は、舎衛国舎衛城の近郊にあつた。目連を靈鷲山へ赴かせるという、この絵師の創意も、或いは、三宝絵が、孟蘭盆経の冒頭部、「聞如_レ是。一時仏在_レ舎衛国祇樹給孤独園」を、訳出しないことと関わる可能性がある。第三段の絵の背景に流れる川についても一考を要する(第四段の絵も同じ)。

⑬図三は、注②前掲の複製に拠る。

⑭注①前掲日本の絵巻版図版解説

⑮例えば宮次男氏も、「第四段」詞書では、明らかに僧を供養した残りの食物を目連自身が母に与えたことを明記しているわけであるが、『三宝絵詞』と『孟蘭盆経』は釈迦の自恣僧供養の教えを述べるに終っており、しかもそれは一般論として述べられているのである。この二書は、孟蘭盆会の由来、意義を明らかにすることを目的として著述されたわけであるから、その食物を具体的に餓鬼道にいる者に与えることまで述べる必要はないと理解できる……(第四段の絵の)こうした救母の結末は、いわば『三宝絵詞』や『孟蘭盆経』の記述の行間に秘められている内容を示したものとええよう」などと指摘されている(宮氏注②後掲論文)。

⑯刑部左衛門尉女房御返事の本文は、『昭和定本 目連上人遺文』2(総本山身延山久遠寺、昭和28年。改訂増補版、昭和63年)

三八六に拠る。なお日蓮には、孟蘭盆御書(二七四)もある。

⑰その由来や実態については、菊池亮道氏「サバのすずめ」(『大法輪』70・8、平成15年8月)参照。

⑱図四は、注②前掲の複製に拠る。

⑲図五は、『法藏敦煌西域文献』8(上海古籍出版社、一九九八年)に拠る。

⑳宮次男氏「絵巻物に見る日本仏教―餓鬼草紙を中心に―」(『東洋学術研究』19・1、昭和55年4月)

㉑鷹巢純氏「目連救母説話図像と六道十王図」(『仏教芸術』203、平成4年7月)

㉒鷹巢氏注②前掲論文、注11

㉓渡辺里志氏「曹源寺本餓鬼草紙(京都国立博物館蔵)における絵画表現とその典拠―第五段詞書の出典と『大般涅槃経』

―」(『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集 言語・文学・文化』所収、和泉書院、平成10年)

⑳渡辺氏は、注③前掲論文の注(27)において左のように言われた。

すなわち、『浄土孟蘭盆経』の「其母猶在鬼中即得鉢飯諸

余餓鬼來從乞飯其母得鉢飯即拳身坐鉢飯上猶故慳惜」と

いう記述と関連づける説である。鷹巢純「目連救母説話

図像と六道十王図」(『仏教芸術』第二〇三号、一九九二

年七月)参照。ただ、『浄土孟蘭盆経』におけるこの記述

は、第四段の詞書の内容とは別の文脈で記されるもので

あり、一考を要する。このほか、『浄土孟蘭盆経』そのも

の成立や普及、餓鬼表現の創造と継承など複雑な問題

を検討する必要がある。これまでの検討でも明らかなよ

うに、この第三・四段の詞書は『孟蘭盆経』あるいは『三

宝絵』にみられる文章と密接に関わりがあり、また第三・

四段の絵画はそれぞれ詞書に忠実な絵画表現をとつてい

るといえる。第四段の絵画については、部分的に

『浄土孟蘭盆経』の影響を受けていることは否定できな

いが、基本的には『孟蘭盆経』あるいは『三宝絵』と密

接に関わりあつて描かれたものと考えたい

㉔本田義英氏「孟蘭盆経と浄土孟蘭盆経」(『竜谷大学論叢』276、

昭和2年10月。後、同氏「仏典の内相と外相」(弘文堂書房、

昭和9年。新装版、昭和42年)二十二に再録)に、敦煌本浄

土孟蘭盆経の主要部分の翻刻(『仏典の内相と外相』所収は全

文翻刻)が、岩本裕氏「目連伝説と孟蘭盆」(法蔵館、昭和43

年。後、同氏「地獄めぐりの文学」(佛敎説話研究4、開明書

院、昭和54年)に再録)一章二節に、その全文の翻刻が収め

られている。なお浄土孟蘭盆経について論じたものに、岡部和雄氏「孟蘭盆経類の訳経史的考察」（『宗教研究』178（37・3）、昭和39年3月）、同氏「浄土孟蘭盆経」の成立とその背景―偽経經典成立に関する一試論―（『鈴木学術財団研究年報』2、昭和41年3月）などがある。また、孟蘭盆経に関する近時の論攷として、入澤崇氏「仏教孟蘭盆経成立考」（『仏教学研究』4546合併号、平成2年3月）、城福雅伸氏「仏教と儒教のかかわり―唯識思想と『孟蘭盆経』における価値観を中心として―」（『印度学仏教学研究』50・2、平成14年3月）、藤本晃氏「『仏説孟蘭盆経』の源流―*Pelamuthu* II. 2「舍利弗母餓鬼事」との比較考察―」（『パリー学仏教文化学』17、平成15年12月）などのあることを、併せて付言しておきたい。

②⑥岩本氏注②⑤前掲書などに詳しい。また、三国伝記と日蓮経との関わりについては、かつて触れたことがある（拙著『中世説話の文学史的環境』（和泉書院、昭和62年）I 三五及び、付参照）。

②⑦大日本古文書七、一〇頁参照。

②⑧石田茂作氏『奈良朝現在一切経疏目錄』（同氏『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（東洋文庫論叢11、東洋文庫、昭和5年）附録）参照。また、牧田氏注⑤前掲書、十四章の「支那撰述

疑経」35（三八九、三九八―九頁）にも言及がある。

②⑨大谷本は、佐藤義寛氏『大谷大学図書館蔵『三教指帰注集』の研究』（大谷大学、平成4年）に影印、翻刻が収められる。また、前田尊経閣本は、太田次男氏「尊経閣文庫蔵（注三教指帰）鎌倉鈔本について」（『成田山仏教研究所紀要』8（成田山新勝寺、昭和59年12月）に翻刻が収められている。

③⑩三教指帰覚明注六にも、次のような浄土孟蘭盆経の引用が見られる（寛永刊本に拠る）。

浄土孟蘭盆経云、過去有_レ仏、名_二定光仏_一。出_二現_レ於世_一、住_二羅陀國中_一。爾時目連、生_二一_レ婆羅門家、字羅卜。其兒_一、少_レ好_二布施_一。母大慳_レ不_レ樂_二布施_一。○五百世入_二餓鬼中_一。目連怜_三ア_レ見_レ母_一死入_二餓鬼中_一、助_レ之、令_二生_レ天得樂_一。これは、成安注の引用と見て良い。

③⑪吉岡義豊氏「密教施餓鬼法儀軌の中国社会伝流」（『智山学报』5、昭和31年2月。後、『智山学报』第10巻（東洋文化出版、昭和59年）に再録）。また、吉岡氏の言う水陸儀文系、即ち、水陸会については、牧田諦亮氏「水陸会小考」（同氏『中国仏教史研究』第二（大東出版社、昭和59年、初出、昭和32年）十章に詳しい。

③⑫吉岡氏注③⑩前掲論文

③③ 宮氏注②①前掲論文

③④ 宮次男氏『日本の地獄絵』（芳賀書店、昭和48年）解説六（186頁）。曹源寺本餓鬼草紙にとつて、これらの指摘は重要且つ、基本的とも言えるもので、例えば上野直昭氏の、

河本本は餓鬼の罰を受けつ、ある状態を描けるに對し、曹源寺本は救済の方法や過程やを描ける点でも思想内容に著しい差が認められる（「餓鬼草紙考察」、同氏『絵巻物研究』（岩波書店、昭和25年。初出、大正13年））

或いは、田中一松氏の、

此の両卷は河本家本が専ら餓鬼の醜穢飢渴の状を描写するに對して、曹源寺本がその救済をも図してゐる如く、その餓鬼描写の特色も両卷に於いておのづから相異なるものがある（注④前掲解説）

以下の指摘を踏まえるものである。

付記 小稿は、平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)による成果の一部である。

（くろだ あきら／佛教大学教授）